

第1話 : 夫と妻、くもりのち晴れ

内 容	音楽など
<p>「和子、もうお前は来なくていいから」</p> <p>いつものように、一緒に病院に行こうと身支度していると、</p> <p>夫が急に私に言った。</p> <p>2年前に夫が胃がんの全摘手術を受けてから、</p> <p>夫のために消化のいい食事を作って、</p> <p>ずっと二人で一緒にがんばってきたつもりだった。</p> <p>そう思っていたのは私だけ？ もしかして再発……？</p> <p>家事が手につかない。</p> <p>お昼すぎ、病院から夫が戻ってきた。</p> <p>妻「ねえ、今日はどんな」</p> <p>夫「なんでもないと云っただろう！」</p>	

夫はさっさと2階に上がってしまった。

気が付くと、私は病院に向かうバスに乗っていた。

どうしたんだろう、私。

一人で主治医の先生に会いに行こうとしているなんて。

病院に着いて自動ドアをくぐったものの、

そこから先に足が進まない。

ふと待合室の奥を見ると、オレンジ色の案内表示板が

目に飛び込んできた。

「がん相談支援センター」と書いてある。

私は吸い込まれるように、その部屋に入っていった。

相談員「相談員の澤井と申します。

こちらでお話を伺いましょうか」

案内されて、

小さいテーブルをはさみ、澤井さんと向かい合った。

妻「今日は、重松先生に話を聞こうと思って来たんです。

でも、突然だし・・・

やっぱり、失礼かなと思って・・・」

相談員「何かご心配なことがあるのですね」

その言葉を聞いて、ここではなんでも話していいような気がした。

夫のがんのこと、二人で頑張ってきたこと、

そして今の、やるせない気持ち・・・。

澤井さんはうなずきながら、じっと聴いてくれた。

相談員「お互いを思いやる、いいご夫婦ですね」

思いやる？

私はハッとしました。

そうか。優しさだったんだ。あの夫の態度は。

夫はそういう人だ。私、忘れてた・・・。

妻「ありがとうございました。こちらに伺って、

大切なことを思い出しました」

相談員「いつでもまた、来てください」

どんなことがあっても、夫と一緒にがんと闘いつづけよう。

胸の中にあつた黒い雲はどこかへ消え、

かわりに明るい、暖かな日差しが射しこんでいた。

私は力強い応援団を得た思いで、がん相談支援センターを

後にした。